

Resilience of Residents in the Stricken Area Who Also Volunteered After the Disaster

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-09-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 武政, 奈保子, Takemasa, Nahoko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.50818/00000080

原著論文

災害ボランティアを行った被災地域住民のレジリエンス

Resilience of Residents in the Stricken Area Who Also Volunteered After the Disaster

武政 奈保子¹⁾

Nahoko Takemasa

要 旨

災害地のボランティアは、悲惨な状況を目のあたりにし、PTSDを引き起こすことが多いといわれている。能登半島地震は、規模の上では被害が少なかったが家屋倒壊が多かった。現地で災害ボランティアを行った住民ボランティア4名は、3年間の間、地震の体験を語ることがなかった。今回、被災地住民でありながら、災害初期からボランティアセンターを運営し、長期に渡りボランティアを続けた人たちのレジリエンス（復元能力）についてインタビューを通して調査することにした。分析方法は、質的分析の中のシーケンス分析を用いた。結果として、4人とも通常から野外活動を伴うボランティアを好む人たちであったが、彼らの精神的崩壊は、これまで他所で行ってきた一時的ボランティアと現地での長期ボランティアの意味の違いからくるジレンマであったことがわかった。更に、彼らのレジリエンスの過程は、直接被災したボランティアと被災地域に住んでいるが直接に被災しなかった人とは異なっていた。直接被災者の2名は今も内省的であり、その後の活動は行っていない。被災しなかった2名は、地域災害ボランティアの組織化を目指して、今も積極的な活動を続けている。

[キーワード]

災害ボランティア、被災地住民、シーケンス分析、レジリエンス

I. はじめに

15年前の阪神淡路大震災以降、新潟、能登、岩手などに大規模な地震が発生している。また、近年、水害などの自然現象による災害は日本中のあらゆる地域に起こり、地域生活を営む人達の防災に対する関心は日々強くなっている。一方災害を経験することは、PTSD（心的外傷後ストレス障害）を誘発しやすいことが、各地で報告されている^{1) 2) 3) 4)}。

全国、全世界で混乱を極める被災地において、率先して災害ボランティアを行う人々がいる。特に阪神淡路大震災以降、地域防災に使命感を持った一般市民は多い。しかし、日ごろから防災意識を持った人たちも、実際には自分の町には災害は起こらないと思っていることが普通であるように思われる。

これらの被災地域の災害ボランティアの中には、被災者としての被害者意識より、災害ボランティアの活動を優先させた人たちがいた。しかし、果敢に活動した人たちは、悲惨な被災地の様子や

当事者としてストレスを受けたはずである。このように被災地で活動し、ストレスを受けた人たちがどのような強さを発揮しているのか、彼らの回復力（レジリエンス）とは、どのようなものであるのかを知りたいと思った。

2007年3月に起こった、能登半島地震では死傷者が少なかったが、家屋の倒壊が多く、帰る家を失った住民が多かった。この災害で被災しながらもボランティアを行った人達のレジリエンスについて災害から3年を経てインタビューを行うことができた。また、レジリエンスは、看護学では「人間の可能性を最大限に広げるように強化する能力を持っている、有害な状況または危機に対する肯定的な反応パターン」⁵⁾と定義する。災害ボランティアの人々は、すでに災害地でボランティアを行うことを強化する能力を持っている。まず、彼らは経験した有害な状況や危機とは、災害がもたらすどのような部分であったのかを知る必要がある。そのうえで、肯定的な反応がされているのかどうかを知ることが災害によるPTSDのレジ

1) 東都医療大学

リエンス促進の看護に役に立つと思われる。

II. 研究の目的

本研究の目的は、看護学の[レジリエンス]という概念を用いて、被災地域住民が行う災害ボランティアという特殊な状況下にあった人たちが有害な状況または危機に対してどのような行動をとり、現在はどうのような行動をとるようになったのかを彼らの持つ「強化する能力」に視点をあてて探求することを目的にしている。

III. 調査方法

1. 用語の定義

被災地域災害ボランティアとは、外部から救援活動に来るテンポラリーなボランティアと異なり、被災地域に住みながら、長期的にボランティアを継続しなくてはならなかった人たちと定義する。

レジリエンスは、NANDA-I看護診断の用語定義「人間の可能性を最大限に広げるように強化する能力を持っている、有害な状況または危機に対する肯定的な反応パターン」を用いる。

2. 対象

本研究は、X県の災害ボランティア・コーディネータ協会からボランティア登録者に対し、ストレスマネジメントの研修を依頼されたことから始まった。インタビュー対象者は、災害ボランティアを3年前の地元の震災時に行った人たちだったが、研修参加者に実際のボランティアの経験者はいなかった。そこで、実際に活動した4人を紹介してもらった。

対象者は、実際に居住地で起こった地震災害にボランティアとして参加した4名で34歳から72歳までの人である。居住地は被災地域で、A、B氏は、直接の被害は受けていない。C、D氏は、家族や親族の住居の倒壊に会い、災害時、避難所生活を送っていた。被災地域での活動を行う前の災害ボランティアとのかかわりは、A氏5年、B氏1年、C氏11年、D氏1年である。対象者の中で、被災地以外での活動経験は、A氏とC氏にあった。

表1 対象者の背景

対象者	年齢	性	居住地	被害	活動歴	経験	職業
A氏	34歳	男	被災地	なし	5年	あり	社員
B氏	60歳	男	被災地	なし	1年	なし	会社員
C氏	65歳	男	被災地	あり	11年	あり	農業
D氏	72歳	男	被災地	あり	1年	なし	農業

3. データ収集

インタビューは平成21年4月15日と9月10日の2回行なった。4月15日は会場にA、B、C氏に集ってもらい、半構造化インタビューによりデータ収集を行った。インタビュー内容は、地域での地震災害以前の活動についての問い、被災地域での活動についての問い、現在の課題と活動についての問いであった。インタビュー時間は、会話形式で総時間180分。1人当たり約60分である。2回目の9月10日には、D氏に単独にインタビューした。これも約60分、同じ質問で行った。

4. データ分析

質的分析には、データを切片化し「コード化・カテゴリー化」するGDTと分析方法とデータを切り離さずテキストを解釈に持ち込むシーケンス分析がある⁵⁾。この研究にはシーケンス分析の方法を用いた。

災害ボランティアという特殊な人達は、特に専門家の集団ではない。したがって、対象者が著者の所属する世界とかけ離れているため、できるだけ彼らの言葉を切片化せずに用いたかった。クリックによるとシーケンス分析はテキストの全体的性質により注意を払う方法論で、会話の持つ意味内容が最後まで保たれるという⁶⁾。

録音はICレコーダーで行われ、音声データは、そのまま逐語録にした。データは、テキストの意味のある部分にアンダーラインを引き、何回も読みこんだ。結果は、3つの研究設問(インタビューガイド)にそって分析し、インタビュー内容は、意味段落に分け番号を付けた。意味内容はプロットとプロットの内容を反映するラベルを付けた。

プロットには説明が加えられ、エピソードの再構成としてシークエンスが行われるようにした。

- (1) インタビュー内容：全ての元データ
- (2) 意味段落：元データを分析しやすく区切ったもの。インタビュー内容と同じもの。対象者イニシャル付き「」で表す。
- (3) ラベルとプロット：ラベル<>、プロットは下線と太文字で表す。ラベルはいくつかのプロットをまとめて表した。
- (4) プロットの説明：丸数字、下線、太文字で表す。
- (5) エピソードの再構成：() 付き数字、太文字で表す。シークエンスであるインタビュー内容に即したもの。

以上の手順で分析を行い結果としてまとめた。結果には、エピソードの再構成のタイトル、プロットの説明、ラベル、プロット、インタビュー内容の順で記載した。

妥当性の確保のために、A, B, C氏のインタビューをまとめインタビューに見せたところ、納得が得られず、D氏を紹介され、9月10日に追加インタビューを行うことになった。

5. 倫理的配慮

インタビュー対象者には、研究の趣旨、データの扱いを書面および口頭で説明した。また、逐語録に人名が入っていないかどうか、一緒に確認してもらった。また、専門雑誌投稿の許可も含めて同意書を取り交わした。

IV. 結 果

- (1) 被災時までの体験：災害ボランティアのきっかけ

①ボランティア精神は、自分の災害体験とは異なる次元で始まる：野外活動、地域活動との親和性
＜モデルとしての災害救助＞

災害救助にあこがれる

C氏「子供のとき、がけ崩れで家が半壊して、その時、自衛隊が救助に来てくれて、ガンガンとやってくれて、きれいにしてくれて、その後で、何も言わずにがんと帰って、自衛隊って助けになるものだと思って、その時から自衛隊に対する見方が世間とは変わってしまった。」

＜自然なボランティア参加＞

どこがボランティアという線引きをしない

C氏「山を歩きながらゴミ拾いをしていたが、どこがボランティアでどこが違うという線引きはなかった。」

地域の関心が災害ボランティアを生む

A氏「地域起こしに興味があって、いろいろやっているうちに、地域には災害時の取り組みが必要だと気がついて、勉強のために新潟地震の時に仲間とボランティアに行ってきたのが始まりです。」

どうせ災害は起こらないと思って研修会に出た

B氏「何気なしに、災害なんて来ないと思いながら、講習を受けました。」

山の会の活動

B氏「通常は山愛会という山の会をやっているんです。」

②他所でのボランティア経験は、被災地ボランティアとは異なる

＜自律性＞

自ら聞きながら仕事を探す

C氏「神戸では、センターのあることも知らなかったもので、友達と2人で走って行って、テント張っている所を聴きまわって後かたづけの仕事をもらった」

A氏「テレビで報道されていないような、ボランティアがあまり活動していないところに、とりあえず行ってこようということになって、それで行ってきたんです」

＜完全性＞

制限時間内では後悔が残る

C氏「こんなんでは、たった3日ぐらいで、わしらはどうにもできんなという感じを受けながら、心ひかれながら、また時間があったら行けばいいなという感じを思いながら帰ってきたんです。」

A氏「制限時間があつた場合に、その中でやることって限られてくるから、やっぱりもっとやらないとだめだなというのは思いましたね、やっぱり。」

(2) 被災者から災害ボランティアへの変容

①日常（平時）から突如災害ボランティアへ
＜ボランティアへの切り替え＞

ボランティアの道案内を依頼された

D氏「そこの商店街の人からボランティアが右往左往しているから道案内してくれと言われたのがきっかけ」

ボランティアへ入る前の段取り

B氏「地元に雪割草祭りがあって、一般の人を連れて案内するのにバスに乗っていたところ地震が来た。道がふさがれたので連絡に走り、重機に来てもらい土砂を取り除き、バスが通れるようにした。その後、これは大変だということで、すぐに町へ引き返し、会社に連絡し、まとまった休みを取れるように段取りして、県庁に行って、災害ボランティアのためのバスを出してもらうように要請した。知り合いに電話して急遽、被災地に戻ることになったのが経緯です。」

近所の見守りからボランティアへ

C氏「地震の後、私は何をすりゃいいのということで、近所の戸が外れたとか、状態の確認だけをして、私の班というのは10軒ほどしかないものですから、その10軒の家を見守りながら地震という感覚もなかったよ。その後、消防団として、集合場所へ走って行って、その日1日っていうか、夜もその場所において、あとは普通のボランティア活動に入った」

②ボランティアセンター立ち上げ期

<個人の強い思い>

消防団員から個人ボランティアへ

C氏「消防団員としての仕事は、一応線引きができたんで、次の日役場へ行って、センターと言えるか良くわからんところに行って、ただ座ってただけ。」

地元の人間なので手助けしたい

C氏「これはボランティアとして行かにゃいかんでなしに、門前町の災害やし、わしらは門前の地元の人間やし、なんか顔出ししてでも、手助けになりゃいいなという感じで、毎日顔を出したのが本当やと思います。」

(3) ボランティアセンターを設置した時期

①混乱する被災地ボランティアセンター

<混乱>

現場は指示もなくどうしていいかわからない

B氏「何をどうしていいかわからないし、指示もないし、そういう感じやったね。」

C氏「だから何を思ったって言ったら、そんなきこれこれ、これこれ、これこれっていう風に指示のような動きがあれば、すぐにどんな仕事でも多分、飛びつけたんじゃないかなという気がします。」

<当事者としての災害との対面>

外で行うボランティアと、当事者として行うボランティアとは異なる

C氏「外へ行ったときは、立ち位置が違うの。僕は個々の直接の親族でもないし、一応部外者だよという。だから、部外者でできることがあればどんどんやるよという風な感じでね。今度は自分が当事者になれば、何をどう依頼していいのかわからないんだね。どう動いていいのかもわからない。意識が、ちょっと一歩離れた意識でなくて、目の前にいっぱい、家がつぶれたり、そんなも見とるし、それが現実やと思えんもんで、頭の中で。これどうしたらいいやろうという感じのことぐらいまでしか言えないんだね。」

②混乱の中、相互作用的技术がないことに気がつく

<相互作用的技术がない>

被災地域ボランティアの孤立

C氏「僕もコーディネータの講習を受けたけど、受けた時のボランティアセンターのイメージと全然違う。何をしたいかわからんし、黙っとろうと思ううちに、どんどん浮き上がってくる自分が分かる。」

B氏「3日目ぐらいに近郊の社協さんが来たけどそのときさえも『おう、何しにこの人ら来たげ』という感じだった。」

C氏「協力会なら協力会でも、コーディネータならコーディネータでもいいけど、ある程度のパワーは必要ねんて。あんな、今ぐちゃぐちゃした所にわし1人いてもなんもならんげん。パワーでないげん。」

一歩先に出るルートが分からない

C氏「だから現実は見えんけれども、それから一歩先へ出て、どんなふうになればいいのかというルートっていうか、ルールが分からないことが、実際なのかと思ってちょっとショックだった。」

住民は避難所においてボランティアの仕事はない

C氏「あの人らは家がどんな状態になっとるって

いうのは、正確に把握できとらんで、明るかった。ほとんどの人がまあ、こんなこと言うのもなんやけど、なんとはなしに、日常と一緒の感覚でおったのではないかと思います。」

B氏「多分、全壊のお宅でも、仮設住宅に入ってから、さあこれからどうしようというような格好で、家の再建とかなんとかって話を真剣に考え出すので、避難所にいる間って、そこまでの気持ちの余裕はないんやろね。」

ボランティア・ニーズがない

D氏「何もすることがないから、ニーズがないから」

自分のことは考えない

C氏「あまり自分ちのことは考えなんだな。おじさんの家も全壊しとれんけど、それも何も、あこは片付けんしょうがないわいって言いながら、ボランティアに頼む必要もなからうという感覚でしかなかった。」

＜相互作用的技术の促進＞

仕事を見た近所の人から頼まれる

D氏「あんなんしてくれるなら、うちの屋根もやると近所の人やってくる」

ニーズの掘り起こし

D氏「ニーズの掘り起こしでチラシを作ってた」

＜自分のことは自分でやる＞

（４）被災地域住民としての活動時期

①自律しすぎることの孤立、相互作用的に対等ではない感覚

＜当事者としての気遣い＞

被災地ボランティアの躊躇

C氏「一応、消防団員なもので、夜、昼なく結構巡回はしとったんですが、そんときに裏道行ってみると、こんな所もこんな風に被害にあつとるんやとかいうふうなことに気付いたのがいっぱいあって、それはメモして、センターへ行っても、誰に言うていいんかということよりも、センターの人間がこうやって拾って、ボランティアの人に依頼したら、あんまりよくないんでないとか、そんな風な感じもあって、結局その家の人が依頼してくるまでは、お蔵入りみたいな感じになって、こういうこともあったよと、そこの地元の人に話

をするしか方法がないような感じになった。」

C氏「ただ、地元の人として、センターに入ってから、ボランティアセンターに顔を出した時に感じたのは、この意識をこのセンターの人にどのようにして伝えていけばいいのかよくわからないんだよね。」

＜日常のコンテクストを知っている＞

依頼がなければ動けない

C氏「依頼を見ながら、あのうちは依頼せんでもよさそうな感じとか、この家はもっと依頼が来てもいい感じとか言うのは分かるが、自分らが依頼もこんのにしゃしゃり出て、こっちの方がひどいとか、こっちの方がひどくないとか言える状態ではないよ。」

平等でなくても口は出せない

B氏「日常、今まで付き合ってきたなかで、その家庭の性格とか、ほとんどわかっているの、意見をいえない。後になってチェックしてみると、この家ばかり言いに来たとか、この家はもっとひどいの、何も言いに来ないというのがあっても口を出すこともできない。」

地元の人が介入するとエコひいきといわれる

C氏「地元の者は後のことも考えんとね。例えば、わしが受付にいて、おれたちの依頼を全部本名門戦でもいいと断ったとか、あのうちは言ってもいいのにやってもらったとか」

②被災地ボランティアから見た外部ボランティア

＜日常のコンテクストを知らない＞

土地の事情が分からず動いているのをヒヤヒヤしながら見ている

B氏「他所から入って来るボランティアセンターのスタッフは、土地の事情が分からないから、ニーズが来たものは1件、1件受けるしかない。その日来た人のニーズをその翌日に派遣するというようなことを一生懸命やっているから、そういう判断（平等に振り分けること）がなかなかできないんだよね。」

A氏「行ったらやるしかないっていう感じ。どんどん人は来るわ、どうすりゃいいのかみたい。とりあえず受付だけはした。ボランティアもきとったさかいに、どこでも勝手に歩かせるわけにはいかんかなっていう感じでしたね。」

<被災地域ボランティアの利点>

現場に素早く行ける人が必要

D氏「あっち、ずっと本通りから行けば遠いいがいね。そこを近道を通して連れて行った。」(地震後道は寸断、家屋は倒れ、危険な状態だった)

<危険な仕事は一般ボランティアにはできない> 危険な仕事はなれた人にしかできない

D氏「そしたら危険な作業で業者にしかできんわけや。あれは普通のボランティアには絶対にできなかった」

地元民としてボランティアを応援する

D氏「やっぱり地元の連中がもうちょっと応援してやらないやだねんやな」

長期ボランティアに入浴許可書を出す

D氏「それで、社協に言ってせめて公営の温泉場にだけでも入れてやってくれと言って、それで証明書を持っている門だけ無料で入れるようにした」

③終盤にニーズが入るようになった

<一般ボランティアにできる仕事の限界>

ニーズが入り忙しくなる

D氏「最後になったら、生活ごみと災害ゴミと。そしてニーズが入ってくるげん、どんなもんやんにいってくれという。俺は判断できんから全部携帯カメラにとって持って帰るといような現場確認の仕事があった」

倒れた墓お越しの仕事

C氏「うちの墓をお輿的売れと言われ血縁だといわれたが見に行くのととても一人ではできず、業者を呼ぶようにいった。ボランティアセンターではできない仕事は業者に依頼させた」

(5) 被災地ボランティア終息期

①ボランティアセンター閉鎖後

<継続する被災地ボランティア>

外部者は去るが地元のボランティアは残る

B氏「結局、ボランティアセンターの外から来た人っていうのは、閉鎖したらさっといなくなるんで、あと後響かないんだけど、地元の人っていうのはずっと残るんで、そこはちょっと激しいところもあるよね。」

ボランティアセンター閉鎖時の問題

B氏「一般的なところは、割り切って閉鎖しても

いいんだけど、やっぱり年寄りだけの家だけはもう少しフォロー、手伝いするようなことがあるんじゃないかっていうようなところが問題ですね。」

外部依存のボランティアを引きづらない

C氏「ボランティアっていうのは、結局お手伝いに来ている人ばかりやさけ、そんな人を引きづっていてもじゃあないな」

②ボランティアセンター閉鎖後の地方

<地方こそボランティアが必要>

過疎地はボランティアも入らない

B氏「ところがたとえばM市でもMとかSとかの過疎地では、置いてきぼりになってしまって、ボラ連の人たちもM市の町の中だけの活動となってしまうやね。そこらへんは反省材料だった。」

地方こそ外部の人の手が欲しい

B氏「郡部の方に行くと、結局、地元の人でそういう動ける人っていうのはなかなか確保できないんで、町の外の人、人手がいるときには、声を掛け合って活動せにゃいかん。」

復興ボランティアセンターを1年間やった

A氏「ボランティアセンターを閉めた後に、「復興ボランティアセンター」に切り替えてなんかあったときのために活動できるようにしてあった。一応青年会議所にもお声はかけてあって、人を集めるようにしたけど、実際何もなかった。」

(6) 危機からの回復後

①被災地域ボランティアに求められること

<組織力をつける>

ボランティアを動かすには組織が必要

C氏「やっぱり、ボランティアセンターを主催するには、実際に動かす組織やね。やっぱり、災害ボランティアと言いながら、お金を持っていて、人を出せるよと言うところが強いんで、ようは組織力の違いかなと。」

仕事を機能的に動かす組織力が欲しい

A氏「それに対応するって言うか、仕事を回せるようは中核やね。仕事を回してみんなに働いてもらうという。そここの意識が、何かどうもセンターの中で機能的に動かす組織力が欲しかったかなと。」

外部ボランティアの能力を生かしきれなかった

C氏「能力なり知識をもうほとんど発揮してもら

うことなしにただの作業者として、もったいない使い方をした。折り紙を折ったり、そんなことを一日して帰ってもらうのは送り込んでくれた企業さんにも申し訳なかった。」

②被災地域ボランティアができること 外部ボランティアを守る

B氏「ボランティアに怪我をさせちゃいけない、事故があっちゃいけない。そういうことがあったら社協さんは当然手を引くが、当然のことやと思う。何かあったら自分のところに責任が来る。」

③災害時に向けて地域災害ボランティアの準備 ＜組織化＞

ボランティアセンターの組織の中にボランティア団体を組み込んでいく

B氏「そこをあんまり危険でないような範囲で受け皿になるからちゃんとしたこういう団体がおると、一匹狼じゃなくてこの人たちにはこん何してちゃんとやってもらうから、ボランティアセンターの中に耐性の中に組み込んで活躍してくれと、」

＜構造化＞

余震のある2週間は全員が一般ボランティアとして働く

B氏「ただし、余震の心配がある最初の2週間は活動しません。一般ボランティアとして動いてもらう。そのあとは基準を作って作業をしてもらう。」

行政との住み分け

B氏「一応は行政とすり合わせ、個人のボランティアはボランティアセンター経由で行う。全壊になった家は地元の業者が行政からお金をもらってやってんだからここには手をつけない。庭の石とかそういうところだけをやりますみたいな。」

危険な仕事はボランティアセンターは引き受けられない

C氏「ボランティアセンターとしては引き受けられない仕事や」

B氏「この作業だけはやっぱりちょっと危ないからボランティアセンターではできません、業者さんに頼んでくださいとかね。」

④組織化のための連携を図る

＜人間関係の必要性＞

日頃から周囲の団体とコネクションを作る

B氏「コーディネータ協会としても、これからは人をどんどん出しますよと地元の社協にときどき顔を出しておくことが必要なんや。」

C氏「だから別口で、声をかけたらすぐに来てもらえるような作業の時に来てもらったり、ボランティアセンターのスタッフとして手が足りるときにbすぐに来てくれるような人達を、どこかでつくっておかにかいかな。」

⑤被災地域住民としてボランティアに参加して理解したこと

＜ボランティアには能力が必要＞

地元のボランティアが出てこない

D氏「地元のボランティアが顔を出さなかった。被災者の中にもいなかった」

＜生活の中のリソース＞

小さなトラブルは隣近所で解決できる

D氏「そんなもんは、ボランティアの連中に頼んでもおらが行ってくればできるさかい」

仮設住宅暮らしのなかでの癒し

D氏「孫が大きくなってつかったらん鯉のぼりを持って行った。おかげで2カ月でボロボロになった」

特技のある人は活躍できる

D氏「無線のアマチュア無線け？あの連中は結構活躍しとったかな」

⑥被災地域ボランティアから見たボランティアに向かない人

敏感な人は困る

B氏「来てもらったら困る人は情報に対し、非常に敏感に反応する人」

来る人は前に出ようとする

C氏「振れる側の人ってそういうところに来るとね、まず前に出よう前に出ようとするわけ」

C氏「そんな出しゃばりもせず、何もせんと車の中に寝て『今日は仕事がないから帰るわ』って言うてくれるような人がいい」

本当にボランティアが好きな人は組織化が嫌い

B氏「本音で動いてくれる人をたくさん確保しないと実際には動けない。そういう人たちはあまりコーディネータの研修を受けてくれない」

C氏「あんな、組織嫌いや」

図1 災害ボランティアの持つ強み



図1は、4人の災害ボランティアにみられるレジリエンスとして被災前にすでに持っていた能力である。動機は、地域愛や災害・野外活動への親和性である。災害ボランティアに傾倒していく過程では、自分から仕事を求めていく自律性である。A, C氏が語るように被災地以外での活動には、ボランティアセンターの存在さえ知らずに活動していた自律性がある。また、A, C氏の語りの中で、物足りなさや後悔という未完成さが次の災害にボランティアを継続する原動力となっている。また、彼らの行動指針は、「自分どころじゃない」という他者への関心の向け方に特徴がある。

図2は、災害ボランティアの受けた有害状況と機器の実情である。C氏の語る外で行うボランティアと、当事者として行うボランティアとは異なるという思いは、日常生活のコンテキストの外にいいのか内にいるかの違いである。また、4人が語る災害ボランティアセンターでの仕事の不満は、人と人を結びつける相互作用的技能不足であった。

図3は、図2のようなストレスから逃れるために行った肯定的な反応パターンである。彼らは、有害状況や危機と思われていた要因を肯定的に利用することに成功している。

図2 災害ボランティアの有害状況と危機の実情

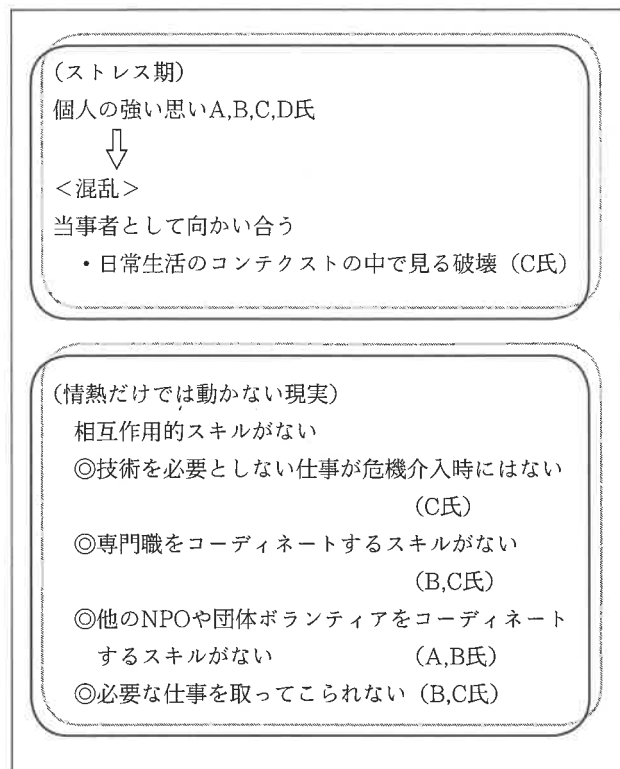


図3 有害状況と危機からのレジリエンス

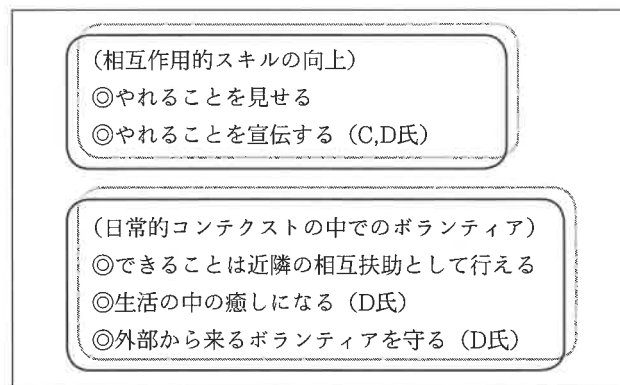


図4 災害ボランティアの内的動機

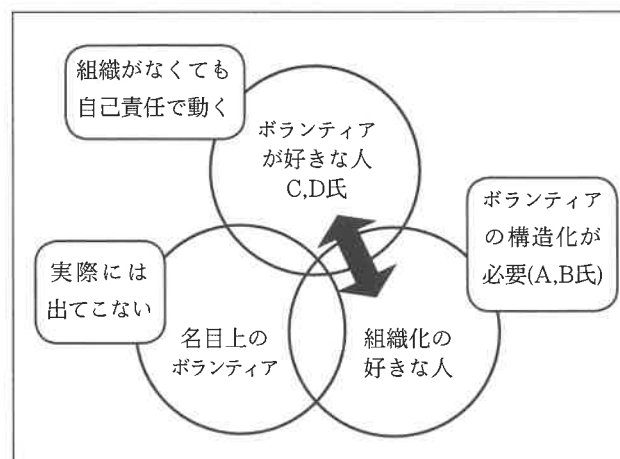


図4は、災害ボランティアの内的動機である。災害後の思いの問いの中で、ボランティア組織の構造化の必要性がB氏、A氏から出てくる。しかし、実際に被災したC、D氏は、ボランティアセンターやコーディネータの組織化に懐疑的であった。矢印は対立を示す。

図5 被災したC氏、D氏の抱える日常的コンテクスト

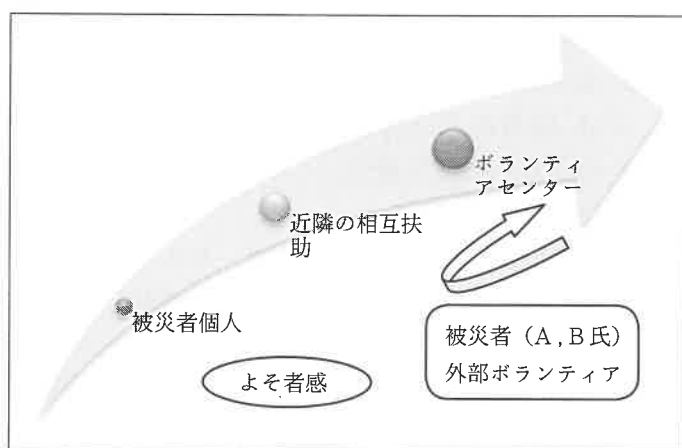


図5は、C、D氏の抱える日常的コンテクストである。彼らは実際に被災したことで、自分の生活上の延長の近隣を助ける行為を拡大した形でボランティアセンターに入ってきた。彼らの被害は、近隣だが、被災者ではないA、B氏の受けたストレスとは異なっている。被災後A、B氏は、災害ボランティアの組織化に傾いていくが、近隣の相互扶助の延長と考えるC、D氏はそこまで客観的判断ができない。

V. 考 察

(1) 災害ボランティアの持つ強み

災害ボランティアを行う人たちは、通常は本職を持ち、災害時に取るものも取らず、ボランティアに邁進する。ここでのインタビューも、それぞれが地域愛を持ち、災害、野外活動に親和性を持つアクティビティな人たちである。ボランティアとは、無償の利他的行動⁸⁾であるので、愛他的な精神を持つ人たちであると思われる。レジリエンスが促進されている場合、彼らの地域愛、災害・野外活動の親和性、利他的行動は促進されるはずである。結果的にA氏は、地元の地域活動

に災害ボランティア活動を結び付けようとしているし、B氏は県内で災害ボランティアの組織化を図っている。組織化、組織されない自由なボランティアにも職業や立場を離れた愛他的行動に基づくものである。

(2) 有害状況と危機

このように、健康的な強さを持つ災害ボランティアであったが、被災地住民として災害と向かい合うことになる。災害ボランティア・コーディネータ会を取り仕切るB氏が何度も声かけしたが、4人が集まることは被災後3年間なかったという。もっとも能弁に語ってくれたC氏は、半年間家から出られなかったという。また阪神淡路大震災以降災害地を回っていたC氏は、以後近郊であった災害ボランティアに参加していない。有害状況と危機は、ボランティアが日常生活の延長上にあうたことである。彼らは、これまで、他所の災害地に出向き、災害ボランティアセンターを頼らず、自律的に活動してきた。しかし、被災地側で長期にボランティアとして活動することは、180度の発想の転換を迫られるものだった。そこには日常的コンテクストの内にいるという立場の変化である。

被災者C氏の役割は、ボランティアセンターでの活躍ではなかったはずで、外部のボランティアの中で浮上感を味わう。また、遠慮しながらのボランティアセンターの活動では、外から来た団体ボランティアの迫力に押され、取り残されてしまう。しかし、個人で来る外部のボランティアは、地元の災害ボランティアセンターを訪ねてくるので、彼らの世話をすることになる。地元のC、D氏は、彼らのために仕事を探し、道案内をし、生活の面倒をみる。彼らは外部ボランティアに十分な仕事を与えられないことに傷つき、非力さを味あう。このことは、他機関との相互作用をコーディネートするケースワーク技術⁹⁾を知らない一般ボランティアの弱みである。

(3) レジリエンス促進

辻らは、Richardsonの「崩壊」から「再建」モデルを用いて精神病の再発予防を考えた¹⁰⁾。レジリエンスとは、危機に対する肯定的反応であり、崩壊からの再建能力である。また、レジリエンス

はPTSDにおける研究から発達したともいわれ、田ら「心的外傷を受けてもPTSDを発症しない人」をレジリエントな人と定義している¹¹⁾。つまり、ここでのインタビューは、レジリエントな人である。C, D氏の会話から、初期的相互作用技術の習得や日常的コンテクストを強みに変える能力を彼らは持っている。つまり、災害ボランティアの再建能力には、自律性に基づく積極性として、アピールによる相互作用技術習得能力、悪い状況でも肯定的な状況に反転させる能力があると考えられる。

また、4人のうち、C氏が見せる地域への気遣いは特殊である。地方の血縁や地縁に根付いた日常的コンテクストは、C氏の自律的で完全性を追求するボランティア的性格とは、相反的である。被災者として、ボランティアに支えられるべき役割から逸脱する行為に対する圧力が、ボランティアを愛するC氏のストレスになっている。被災地域での災害ボランティアは、そこに住み続けなくてはならないので、地域の事情に即した行動しか取れないのだという発言は、過疎化の進む小規模の集落の中では当然起こりそうなことである。その地域に内包する日常的コンテクストは、被災地域でボランティアを行う人たちのレジリエンスの抑制要因ではないかと考えられる。

VI. 結 論

本研究の目的は、看護学の[レジリエンス]という概念を用いて、被災地域住民が行う災害ボランティアという特殊な状況下にあった人たちが有害な状況または危機に対してどのような行動をとり、現在はどのような行動をとるようになったのかを彼らの持つ「強化する能力」に視点をあてて探求することであった。

彼らのレジリエンスを高めるために「強化する能力」とは、自律心、完全性、利他的行動、アピール能力、状況の肯定化である。また、抑制要因として日常的コンテクストの中での周囲に対する気遣い。役割の不明瞭さ、周囲の目、住み続けるための社会的配慮などが考えられる。

引用文献

- 1) Morren Mattijn, The Health of Volunteer Firefighters Three Years after a Technological Disaster, Journal of Occupational Health, 47(6)pp.523-532, 2005.
- 2) 阿部真由美、震災体験による学生のストレス度、長岡看護福祉専門学校紀要3号、pp. 39-47, 2006.
- 3) 黒木俊秀、災害と心のケア、教育と医学53(1) pp. 92-96, 2005.
- 4) 吉川武彦【MCRT(心理的危機介入チーム)】地震などの自然災害による心的外傷その日本的特徴と癒し、こころの健康、22(2) pp. 36-57, 2007.
- 5) T. ヘザー・ハードマン編集、日本看護診断学会 監訳、中木高夫、NADA-I看護診断 定義と分類Ⅱ2009-2010、p328, 2009.
- 6) ウヴェ・フリック著、小田博志、山本則子等訳、質的研究入門<人間科学>のための方法論、春秋社2002、pp. 266-267.
- 7) 菅麻志保、災害ボランティア活動の理論に関する一考察、安全安心社会研究、ワーキングペーパー(「防災ボランティア論入門」弘文堂、2008、59-81)
- 8) 金築智美、金築優、向社会的行動と過剰適応の組み合わせにおける不合理な信念および精神的健康度の違い、パーソナリティ研究18(3)、2010、pp. 237-240.
- 9) 秋山美紀、連携事例で学ぶ担当者必須の対人関係スキル コミュニケーションの問題、地域連携network、2010、3(1) pp. 49-51.
- 10) 辻野尚久、龍庸之助、佐久間啓、水野雅文、統合失調症—再発脆弱性とレジリエンスに基づく再発予防の試み、臨床精神医学37(4)、2008、pp. 387-394.
- 11) 田亮介、八木剛平、田辺英、渡邊衡一郎、精神疾患におけるレジリエンス研究—PTSDからの発展、臨床精神医学37(4)、2008、pp. 349-355.

Resilience of Residents in the Stricken Area Who Also Volunteered After the Disaster

Nahoko Takemasa

Abstract

Many volunteers working in disaster areas suffer from PTSD after confronting dire situations. Although the Noto Peninsula Earthquake damage was limited, many houses were destroyed. Four residents in the quake stricken area who had volunteered for a long time from the early stage of the disaster, managing a volunteer center in the area, were interviewed to examine resident resilience and ability restoration. They had not discussed their experience for three years since the disaster. Sequence analysis was used for qualitative analysis. The four residents had regularly volunteered, including outdoors, before the disaster. The results revealed that their psychological collapse had been caused by a dilemma from differences in meaning between the short-term volunteer work they had done in other areas before the disaster and their long-term volunteer work in their area following the disaster. Those who were directly affected by the quake and those who were not, both living in the stricken area, had different resilience processes. Even now, the two direct victims are reflective and thoughtful; they have not been involved in any volunteer work since then. The other two, who were not direct victims, have continued to volunteer in order to better organize local disaster volunteers.

Key words: Disaster volunteers, residents of the stricken area, sequence analysis, resilience